

ベランダでも育てられる
みんなの
コンテナ菜園

カブ
長い歴史で
豊富に品種が発達



「玉波」
小カブサイズから13cm程度までの大きさで収穫できる中カブ品種。裂根やス入りが遅く、白さび病に強い

カブは弥生時代に中国から渡り、た「和種系」と、後にシベリア経由で入ってきた西欧由来の「洋種系」の品種があります。

地域ごとにさまざまな在来種が発達し、愛知・福井県を結ぶ線を隔て、西は千枚漬けで有名な「聖護院」、中カブの代表品種「天王寺」などの和種が、東は赤かぶ漬けにされる岐阜の「飛騨紅」、山形の伝統野菜「温海」など洋種が主に分布しています。現在は、これらをかけ合わせた栽培しやすいF1品種もあります。

発芽と根の肥大適温は涼しく、種まきは春と秋が適します。まき時期は品種ごとに異なるので注意します。

根菜類ですが太るのは主に根よりも子葉と根の間の胚軸なので底の浅いプランターで栽培できます。ただし、浅型プランターは土の量が限られるので、初期は乾きによる「裂根」や肥料切れによる「ス入り」に注意し、適期に収穫します。

浅型プランターでも栽培できる

1 種まき

1 B化成41gと過リン酸石灰14gを混ぜた土(12L)を長さ60cmの浅型プランター(14L)へ入れる。



土をならしたら、ペットボトルのふたなどを使い、深さ1cmのまき穴を株間10cm、条間15cmになるよう開ける。まき穴に種を2〜3粒まき(写真1)、土をかけ、手のひらで土を



押さえ、ジョウロなどで優しく水やりする。
適温を保ち、出芽までは乾かさないうようにして一斉に出芽させる。種まき直後に防虫と保温・保湿のため不織布をかけておく(写真2)。

2 間引き・土寄せ

種まき後2〜3日で芽が出てくる。本葉3〜4枚までに元気が良過ぎたり悪過ぎたり、胚軸が太いもの、立枯病で褐変している株などを、ハサミを使って1カ所1株にする(写真3)。間引き後は、株がぐらついて傷まないよう土を株元へ寄せておく(写真4)。



土が乾き過ぎると皮が硬くなり玉が裂けるので本葉5〜6枚までは乾き過ぎないようにする。梅雨時期は雨に直接当たらない方がよい。

3 収穫

玉の直径が約5cmから順次収穫する(写真5)。収穫遅れは玉がスポンジ状になるス入りや裂根、葉が黄色くなる原因になる。小カブの場合、収穫サイズになつてからの収穫適期は、春・秋どりが3日前後、冬どりは7日まで、夏どりは2〜3日が目安。一方で中カブは小カブサイズから長く収穫できる。
※温暖地を基準に記事を作成しています。

